

武蔵野市青少年平和交流派遣団 活動報告書

令和7年8月8日(金)～10日(日)



武 蔵 野 市

派遣にあたって



今年には戦後 80 年を迎える節目の年です。今回の青少年平和交流派遣団は、この節目の年に、あらためて次世代を担う中学生・高校生の皆さんが実際に被爆地を訪れることにより、被爆の実相や戦争の悲惨さを知り、平和の大切さを再認識してもらうことを目的に、長崎市へ派遣いたしました。

武蔵野市には第二次世界大戦中、戦闘機のエンジン製造工場である中島飛行機武蔵製作所がありました。この工場を標的として、昭和 19 年 11 月 24 日から終戦まで、9 回もの空襲があり、工場の従業員をはじめ周辺住民など多くの方が犠牲となりました。

この戦争の記憶を継承し、平和の尊さを次世代へつないでいくため、平成 23 年には武蔵野市平和の日条例を制定し、市内に初めて空襲のあった 11 月 24 日を「武蔵野市平和の日」と定めています。

事前学習では武蔵野市内の戦争遺跡を巡り、中島飛行機武蔵製作所への空襲や平和祈念像の制作過程等、身近な場所での戦争の記憶・記録を学びました。そのうえで、長崎市への派遣中は、公益財団法人長崎平和推進協会が主催する青少年ピースフォーラムにおいて全国の同世代の参加者と意見交換を行い、平和に対する学びをより深めることができた 3 日間だったことと思います。

世界では戦争・紛争により、今もなお子どもを含む多くの方々が危険に脅かされ、大切な命を奪われている状況にあります。

団員の皆さんには、今回学んだことや感じたことをご家族や友人に広く伝え、平和を守ることの大切さを広めていただけることを願っています。

市ではこれからも、戦争の歴史や記憶を、世代を超えて共有し、戦争も核もない世界を実現するため、国内外へ平和の尊さを発信してまいります。

令和 7 年 11 月
武蔵野市長 小美濃 安弘

も く じ

- 1 武蔵野市青少年平和交流派遣事業について……………1
- 2 平和交流派遣の様子……………5
- 3 事前学習の様子……………11
- 4 平和交流派遣を終えて……………57

表紙イラスト : 伊藤 千夏



武蔵野市 青少年平和交流派遣事業 について



武蔵野市青少年平和交流派遣団の概要

長崎に原子爆弾が落とされてから今年で80年が経過し、被爆の実体験者が少なくなる中、あらためて若い世代に、戦争の実相を学び、平和について考えてもらうため、市内に在住・在学の中学生・高校生12名を青少年平和交流派遣団として、長崎で行われる青少年ピースフォーラム（主催 公益財団法人長崎平和推進協会）に派遣しました。またサポーターとして大学生2名も参加しました。

派遣前の3回の事前学習で原爆や武蔵野市の空襲について学び、8月8日～10日は、平和祈念式典や青少年ピースフォーラムで被爆体験講話や平和を考える学習会に参加しました。

今後、団員たちは派遣で学んだことを家族や友人たちに伝え、平和への想いを広めていきます。

*青少年ピースフォーラム

全国の青少年と長崎の青少年とが、ともに被爆の実相や平和の尊さについて学び、交流を深めます。同フォーラムでは、長崎市青少年ピースボランティアの高校生・大学生が平和学習の進行や被爆建造物の案内などを行っています。



武蔵野市青少年平和交流派遣団名簿

団 員 12名

氏 名	学年	グループ
讃井 春南 (さぬい はるな)	高1	1
鳥羽山 陽慶 (とばやま はるよし)	高1	
中野 花菜 (なかの はな)	高1	
大西 紗和 (おおにし さわ)	中1	
伊藤 千夏 (いとう ちなつ)	高1	2
小出 結貴 (こいで ゆき)	中3	
松田 逢 (まつだ あい)	中3	
加藤 慧 (かとう けい)	中1	
三辻 歩実 (みつじ あゆみ)	高2	3
橋本 光夏 (はしもと ひな)	高1	
高山 葵 (たかやま あおい)	中2	
松田 倫 (まつだ りん)	中1	

大学生サポーター 2名

氏 名	学年
林 健心 (はやし たけひろ)	大3
根本 釉 (ねもと ゆう)	大1

引率職員 2名

氏 名	所 属
毛利 悦子 (もうり えつこ)	市民部 市民活動担当部長
大橋 真木 (おおはし まき)	市民部 市民活動推進課

令和7年度 武蔵野市青少年平和交流派遣団 行程表

8月8日(金曜日)		8月9日(土曜日)		8月10日(日曜日)	
5:50	三鷹駅北口集合				
6:50	羽田空港着			7:00	朝食
		7:30	朝食	7:50	ホテルロビー集合
8:15	羽田空港発				
		8:50	ホテルロビー集合	8:45	グラバー園見学
10:05	長崎空港着	10:45	平和祈念式典(サテ	10:00	山王神社見学
11:00	昼食	11:45	ライト会場・出島メッセ)	11:00	城山小学校見学
12:40	原爆落下中心地・ 平和公園見学	12:00	昼食	12:30	昼食
				※	
14:00	青少年ピースフォーラム (平和会館ホール)	14:00	青少年ピースフォーラム (出島メッセ)	14:01	新大村駅発
~		~			
17:30		16:45			
		17:00	原爆資料館見学	17:48	博多駅発
18:00	交流会・夕食	18:15		18:00頃	福岡空港着
~	(長崎新聞文化ホール)				
19:30		19:00	夕食		
20:15	ホテル着	20:15	ホテル着		
	ミーティング		ミーティング	21:00頃	福岡空港発
				22:30頃	羽田空港着
				0:25頃	吉祥寺・三鷹・武蔵 境の各駅にて解散

※悪天候による欠航、運休等のため当初予定より変更



平和交流派遣の様子



平和交流派遣の様子

1日目 8月8日(金)

- ・原爆落下中心地・平和公園見学
- ・青少年ピースフォーラム 1日目
- ・交流会



○平和公園

平和公園には、いたるところに平和を祈念する像がありました。式典前日に訪れたので人はさほど多くなく、じっくり見ることができました。折り鶴が連なって沢山置いてあるのが印象的で美しいと感じると共に、脈々と受け継がれている平和への強く切実な思いを感じました。

○原爆落下中心地

長崎に落ちた原爆は上空 500m で炸裂しました。いざ中心地に立って青空を見上げ 500m上を想像しても、途方のない距離に思えました。しかし、言い換えれば、それだけ離れていたのに幾多の命を奪ったのです。そう考えると核の限りない恐怖を感じます。80年前に、確かにこの地が戦禍に飲み込まれ、そして原爆落下中心地になったと現地で感じられることは特別で尊い体験でした。



(中3 小出 結貴)

○青少年ピースフォーラム 1日目

プログラム〈Aコース〉

- ・被爆体験講和
- ・こちんまりフィールドワーク
- ・室内学習 原爆の概要など



被爆体験講和では、当時10歳で、爆心地から3.6キロの位置で原爆を体験された三瀬清一郎さんのお話を伺いました。一瞬にして何もかもを壊してしまうこと、その後もずっと見えない恐怖を与え続けることが、原爆の恐ろしさなのだと思います。

こちんまりフィールドワークでは国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を訪れました。館内はどこにいても水の音が聞こえるように工夫されており、水を求めて亡くなった方々への祈りが込められていることを知りました。地下には、原爆で亡くなった方々の名簿が並んでおり、今年で205冊になるそうです。そのうちの一冊は名前もわからない方々の分で、胸が締めつけられました。続いて訪れた原爆中心地では、周囲の木々がなぎ倒される中、一本の木だけが真っすぐ立っていて、爆風が真上から襲ったことを示すその木を見て、原爆の破壊の凄まじさを改めて実感しました。近くに移設された旧浦上天主堂の遺構も見学し、土台が爆風でわずかにずれているのを確認しました。その「ずれ」を目の当たりにし、原爆の力の大きさを肌で感じ、また胸が強く締めつけられました。



室内学習では、「戦時下擬似体験」のワークショップに参加しました。自分にとって大切なものをカードに書き、手に持って始めますが「空襲で家がなくなりました」「学校が工場になりました」といった状況が次々と告げられ、手持ちのカードを失っていきます。最後には何も残らず、とても悲しい気持ちになりました。そして、平和が当たり前すぎて、そのありがたさに気づけていないことを痛感しました。



(中3 高山 葵)

2日目 8月9日(土)

- ・ 平和祈念式典
- ・ 青少年ピースフォーラム 2日目
- ・ 原爆資料館・平和祈念館見学



○平和祈念式典

平和祈念式典には長崎市の出島メッセ長崎から参加しました。会場に入ると、すでに多くの方が席につき、静かな緊張感が漂っていました。

11時2分の黙祷の時間には、会場全体が静寂に包まれ、ただ祈ることしかできませんでした。そのとき、犠牲になった方々や残された人々の思いに少しでも寄り添いたいと、強く願いました。普段、平和であることは当たり前のように感じていましたが、そのあたり前は、失われた多くの命と、平和を願い続けてきた人々の努力の上にあるのだと実感しました。

今回の式典を通して、私は「平和は祈るだけではなく、日々の暮らしの中で守り続けるもの」だと学びました。身近なところからでも、平和を大切にする心を言葉や行動で表すことが、次の世代につながっていくのだと思います。このような大切な機会を与えていただいたことに感謝しながら、学んだことを忘れず、これからも平和の尊さを伝え続けていきたいと思っています。



(高1 鳥羽山 陽慶)

○青少年ピースフォーラム 2日目

2日目のピースフォーラムではグループにわかれて意見交換をしたほか、マレーシア元首相の特別講演を聞きました。

意見交換は1日目と違うグループで行うことになり、とても緊張していましたが、意見交換の前に行った「NGワードゲーム」によって少し緊張が解けて楽しく話をすることができました。意見交換のテーマは「違い」についてで、意見交換をすることによって自分が思っていたこととは違うことを学び、考えがとても増えた気がしました。また、日本各地の色々なことを知ることができました。学校で行う意見交換ではなく、実際に自分で書いてみたり、一人ずつ発表することによって、より自分の意見に自信を持つことができました。ピースフォーラムの方々の進行はリーダーシップがあってわかりやすく、たくさん話すことによってよりいっそう仲良くなった気がしました。

特別講演ではマレーシア元首相の「マハティール・ビン・モハマド」さんのお話を聞くことができました。自分たちが思っていた以上に日本はいろいろな国と関わり、今の日本ができていることがわかりました。歴史を踏まえた上で私たち現代の学生に対しての期待を語る姿に、私も自分の役割を考え直すきっかけとなりました。このような貴重な時間をくださったことでより一層これからの日本について考えるきっかけになったのでとても思い出深くなりました。



(高1 中野 花菜、橋本 光夏)

○原爆資料館・平和祈念館

原爆資料館では、長崎に投下された原爆の被害がどれほどのものだったのかを知ることができました。原爆投下後の実際の写真からは、変わり果てた長崎の風景、爆風や熱線によって大きな被害を受けた人々の苦しみなど、原爆の悲惨さが読み取れました。そんな中でも、当時小学生が使っていて、名前も入っているお弁当箱が黒く焦げているというものは、原爆による被害の大きさを特に深く感じるものでした。

平和祈念館では、原爆死没者の方々の名前が書かれている本が収納されている場所を見学しました。周りに水が多く見られるのは「水をください」と当時水を求めていた声から、少しでも水を飲ませてあげたいという思いがあったからだそうです。また、被爆して亡くなられた方々の写真を見て、原爆とは平和に過ごしていた人たちの日常を一瞬にして奪ってしまうものだと言語っているように思いました。

(中 | 松田 倫)

3日目 8月10日(日)

- ・山王神社見学
- ・城山小学校見学
- ・グラバー園見学



○山王神社・城山小学校

長崎市のガイドの方に案内していただき、山王神社・城山小学校を見学しました。山王神社では、有名な片足鳥居やクスノキを見ることができました。激しい爆風により片足になってしまった鳥居や物の破片が内部に入り込んでいるクスノキなどを実際に見て、原爆の破壊力を改めて実感しました。

城山小学校では、当時被爆した子供たちのエピソードを聞き、自分よりも幼い子供たちがとても悲惨な環境に置かれていたことに強く衝撃を受けました。現地の方のお話を聞くことができるのは、語り部を継いで行っている方々のおかげだと感じます。とても貴重な体験でした。

(中 | 松田 逢)





事前学習の様子



事前学習について

結団式

6月16日(月)

結団式で初めて、今回派遣事業で共にする参加者の顔合わせをしました。はじめは緊張した面持ちでしたが、式の終わりにはすでに仲良く会話をしていて、これからの学習会や派遣事業がとても楽しみになりました。

結団式の当日は資料の配布と各自の自己紹介、派遣に向けての思いを聞きました。団員一人ひとりが今回の派遣で何を学びたいのかについて、自分の言葉で話していたことが強く印象に残っています。それぞれの思いを聞き、大学生サポーターとして中高生をサポートできるように私も頑張りたいと思いました。

(大学生サポーター 根本 紬)



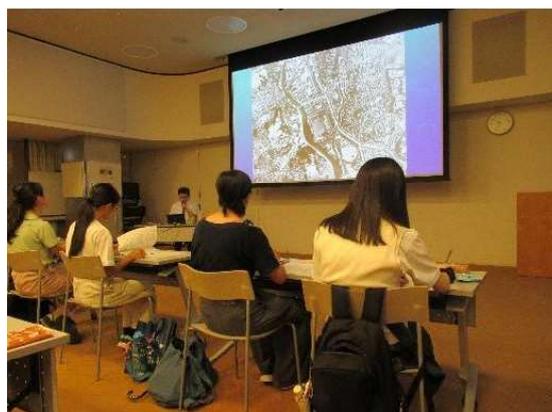
第1回学習会（6月26日(木)）

第1回目の学習会では、講師の牛田守彦さんから、第二次世界大戦時の武蔵野市についてお話を伺いました。さらに、長崎で被爆された藤本竹次さんの、被爆体験を語ったDVDを視聴しました。

牛田さんの講義では、原爆が投下されるまでの経緯や武蔵野市への空襲について学習しました。武蔵野市は、かつて中島飛行機武蔵製作所という飛行機工場があり、そのために空襲が多い地域だったようです。さらに、このあたりには原爆の模擬爆弾も落とされたことから、今まで自分には関係が少なかったと思っていた原爆や戦争は、必ずしも遠い世界の話ではないと感じました。たった1発の爆弾で、「当たり前」が急に終わってしまう。自分の大切な人が、悲惨な状態で見つかる。その恐ろしさを、身に染みて実感しました。

被爆者の高齢化が進んでいることについてもお話を聞きました。対面の形ではないDVDではありましたが、被爆のお話を聞けるというのは我々戦争を知らない世代にとって貴重な経験だと感じます。そのように、様々な形で後世に記憶をつないでいただいた被爆者の方々に感謝をしつつ、平和と戦争についてもっと興味を持ち、日常の中で自分ができることを考えていきたいと思いました。

（中1 大西 紗和）



第2回学習会（7月13日（日））

第2回学習会では、第1回学習会に引き続き牛田守彦さんが講師で、中島飛行機製作工場の跡地にある都立武蔵野中央公園や戦跡の残る源正寺や延命寺のほか、ふるさと歴史館を巡るフィールドワークを行いました。

中島飛行機製作工場にたくさんの爆弾が「精密爆撃」の実験目的で落とされました。それを聞いて、戦争ではたくさんの命が失われたことにあらためてショックを受け、悲しくなりました。また、戦争で爆弾が落ちたのは広島や長崎で、自分達の住む武蔵野市には落ちていないだろうと思っていたので、自分達の住んでいる地域に爆弾が落ちていたと考えると恐ろしくなりました。

ふるさと歴史館では学芸員の高野弘之さんからお話を伺い、「調べる人や保存する人、裏方の人など、すべての人に感謝を」という言葉に感動しました。そして、今自分たちが戦争について学んでいるのはかげで歴史を伝える人たちがいるからだと気づきました。

このように、第2回学習会では、戦争はどこか遠くではなく、自分のすんでいる地域のすぐ近くのところでも起きていたのだということが身に染みてわかりました。

（中 | 加藤 慧）



第3回学習会（8月4日(月)）

第3回事前学習会では、団員が複数のグループに分かれ、テーマに沿って調べ学習をし、発表しました。グループテーマは原子爆弾の被害について、長崎県の特色について、世界の核兵器についての3つです。団員それぞれが資料を作成し、プレゼンテーション、ポスター発表を行いました。一つ一つが個性あふれるまとめ方や工夫がなされていて、興味を引きました。



発表を聞いて、同じテーマの発表でも、違う視点からの切り口だとまた知らなかった情報や知識を蓄えることができました。例えば、長崎へ投下された原爆についてというグループテーマで物理的影響を調べる中でも、人々への影響や爆弾自体の仕組み、広島県に投下されたものとの違いというように分けて考えることで、さらに新たな気づきや発見がありました。また、長崎県の歴史や文化、名産品について学び、地域の特色を知ることによってただ原子爆弾が落とされてしまった場所という認識だけではなく、長崎県としての魅力についても知ることができました。



みんなでリサーチしたものを発表し合うことで、新たな学びにつながり、青少年平和交流派遣団として長崎に行く時のイメージがつかめました。派遣団一丸となって長崎県や戦争について、学ぶことで派遣団の中での知識の発信をする第一歩ともなりました。実際に長崎県への派遣では第3回学習会で得た知識を活用し、学びを深めることができました。

第3回事前学習会 発表資料

1. グループ3【G3】(担当者)敬称略

大テーマ：長崎の自然・歴史・文化を調べてみよう

小テーマ

- ①長崎県の地理や気候(松田 倫)
- ②長崎の海外交易の歴史(三辻 歩実)
- ③長崎名物・名産品について(高山 葵)
- ④長崎県の現状(面積・人口・平和活動について)(橋本 光夏)

2. グループ1【G1】

大テーマ：原爆の被害について調べてみよう

小テーマ

- ①長崎に原爆が投下されるまでの経過(鳥羽山 陽慶)
- ②原爆による物的被害とはどのようなものだったか(讃井 春南)
- ③原爆による人的被害とはどのようなものだったか(大西 紗和)
- ④広島と長崎に落とされた原爆に違いはあるか(中野 花菜)

3. グループ2【G2】

大テーマ：世界の核兵器と廃絶の取り組みについて調べてみよう

小テーマ

- ①世界にはどのくらいの核兵器があるか(松田 逢)
- ②世界の核兵器廃絶の取り組み(加藤 慧)
- ③日本の核兵器廃絶の取り組み(小出 結貴)
- ④核の平和利用とはどんなことか(伊藤 千夏)

個別学習課題 3班松田倫

長崎の地理や気候

地理

地理の特徴

- ・九州地方の西部に位置する
- ・山地が大部分を占めており、平地が少ない



多くの島々

長崎県は、有人島が51島、無人島を含めると1479もの島がある県で、島は面積の45%を占めています。

51の有人島だけでも、**約11万人**が暮らしています。

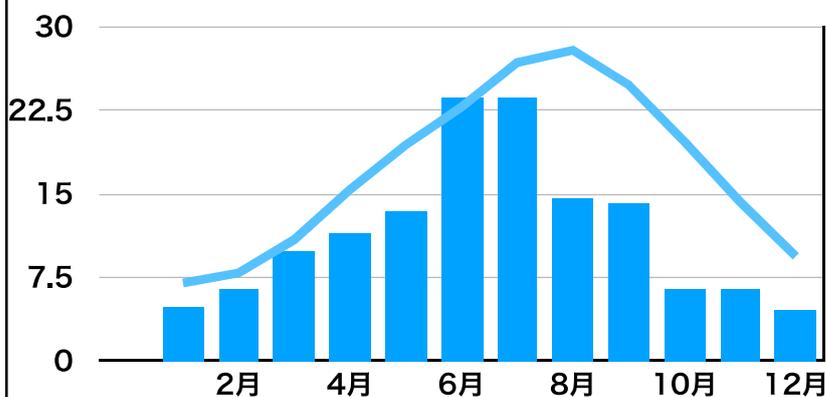
複雑な海岸線

島が多いことや、複雑なリアス式海岸であることによって、長崎県の海岸線は、**4173km**と非常に長い距離となっています。

海岸線の長さは、北海道に次いで2位！

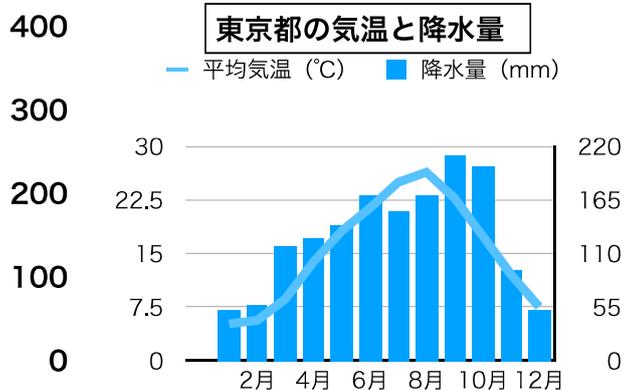
長崎県の気温と降水量

— 平均気温 (°C) ■ 降水量 (mm)



東京都の気温と降水量

— 平均気温 (°C) ■ 降水量 (mm)



気候

<グラフから分かること>

- ・東京都よりも、長崎県の方が気温が比較的高く、降水量も多い
- ・長崎県では、6、7月の降水量が多い

長崎県の気候

冬も比較的温暖で、年間を通して降水量が多いのが特徴です。

また、6～7月の梅雨時期には集中豪雨による災害も発生しやすく、台風の常襲地帯でもあるのが、年間降水量が多い要因の一つです。

長崎の海外交易の歴史

グループ3 三辻歩実

目次

1. 年表
2. 出島とは？
3. 出島の歴史 2カ国
4. どんなものが貿易で取引されていたか
- 5.江戸時代以降の長崎の貿易と出島

1. 年表

安土桃山時代

- 1543年 ポルトガル人が種子島に漂着
- 1549年 フランシスコ＝ザビエルにより、**キリスト教**が伝えられる
- 1550年 ポルトガル船、平戸に来航。南蛮貿易開始
- 1562年 唐船が初めて長崎港に来航
- 1587年 バテレン追放令（宣教師を追放。キリスト教を警戒）

江戸時代

- 1600年 リーフデ号が豊後に到着
- 1609年 オランダ、平戸商館を設置
- 1613年 **キリスト教禁止令**

2. 出島とは？～出島ができたきっかけ～

1636年にポルトガル人による布教防止や貿易の監視を目的として幕府が設置した島。

ポルトガル人を強制的に移住させた。



2. 出島とは？

1637年、島原の乱が起こる



ポルトガル人の日本渡航禁止



出島、無人島化



3. 出島の歴史 オランダ

オランダは、幕府とキリスト教を布教しないと約束。

島原の乱で原城を砲撃したことで、幕府に対して忠誠心を示した。



3. 出島の歴史 オランダ

取引相手であるポルトガルがいなくな
ってしまった...
オランダを出島に移転して欲しい。新たな
貿易相手にしたい。



商人

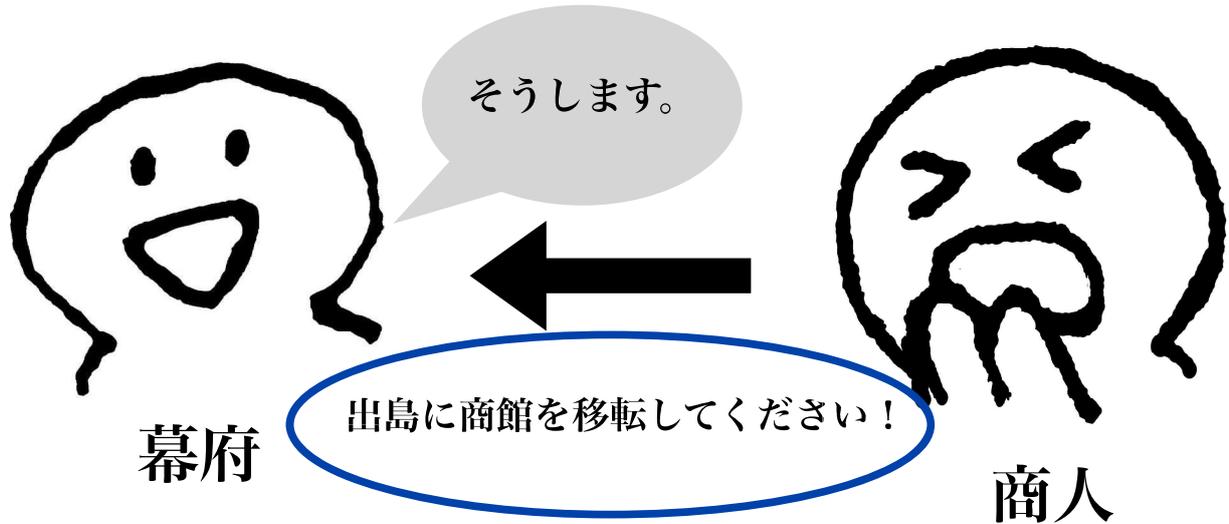
3. 出島の歴史 オランダ

約束はしたがオランダもキリスト教の国。
特定の地域だけが栄えることも避けたい。



幕府

3. 出島の歴史 オランダ



3. 出島の歴史 オランダ

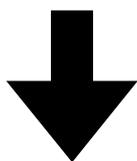
1641年、オランダ商館が出島に移転された。

鎖国している江戸時代に唯一西ヨーロッパに開かれた島として活躍した。



3. 出島の歴史 中国

1635年以降、中国との貿易は長崎港のみで行われていたが、中国人たちは長崎市内に散宿していた。



密貿易の増加が問題に！！

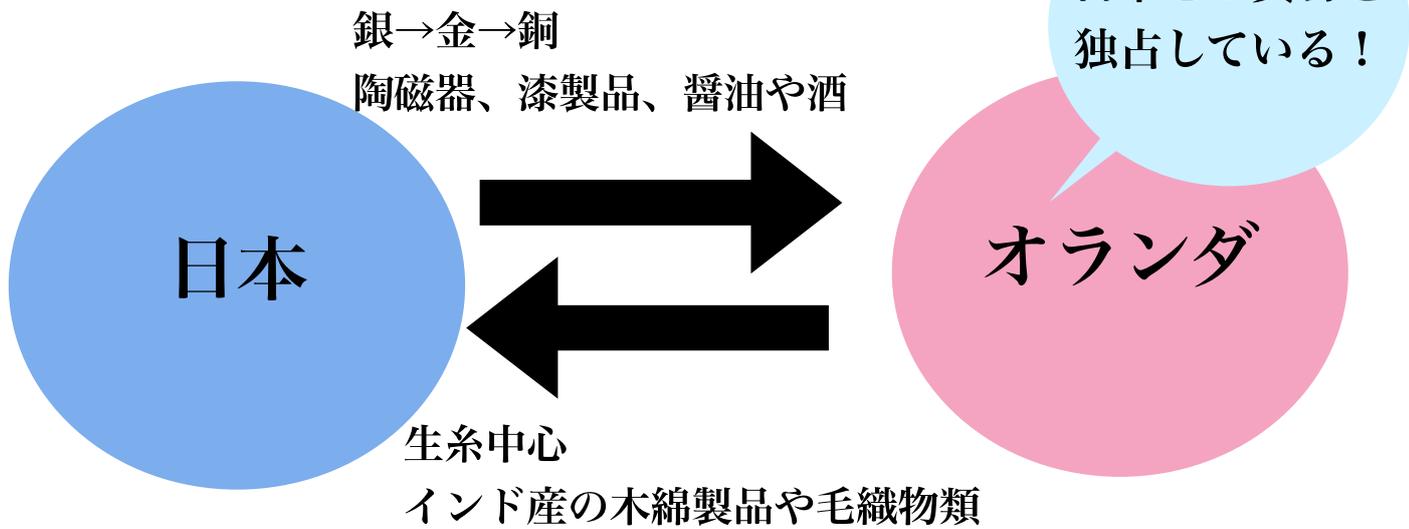
3. 出島の歴史 中国

1688年、密貿易を防ぐために出島に唐人屋敷を作り、貿易の監視を始めた。

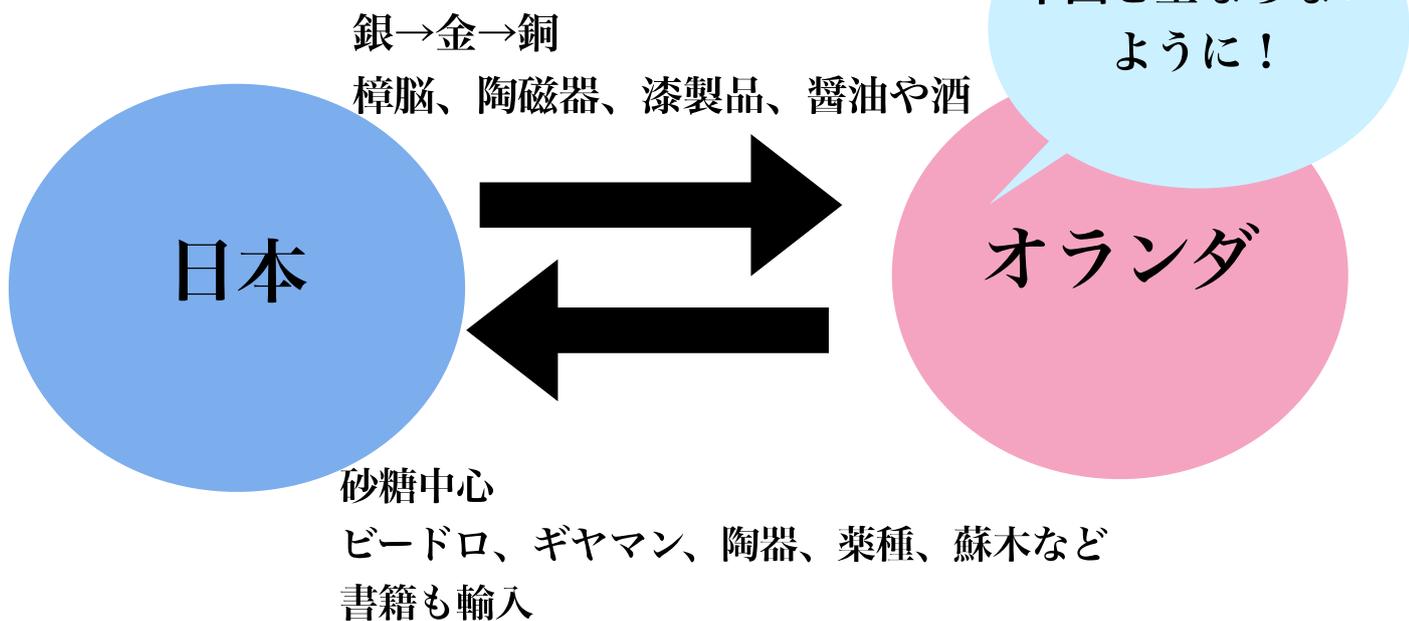
中国人は多くの入国手続きを経て、唐人屋敷に入った。



4. どんなものが貿易で取引されていたか



4. どんなものが貿易で取引されていたか



4. どんなものが貿易で取引されていたか



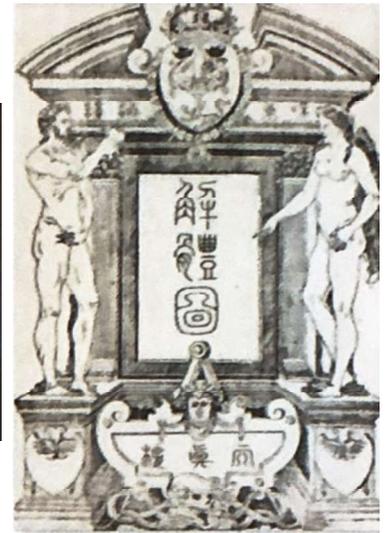
日本シブカワ百貨事典 「ほっぺん、ほっぺん、ほっぺん！～美しい長崎ビードロのおもちゃ～」

<https://shibu-kawa.jp/feature/f000066.html>



岸本挽物 「江戸ギヤマン～明治大正のウランガラス」

<https://kisshiandbu.chu.jp/news/blog/glass/>

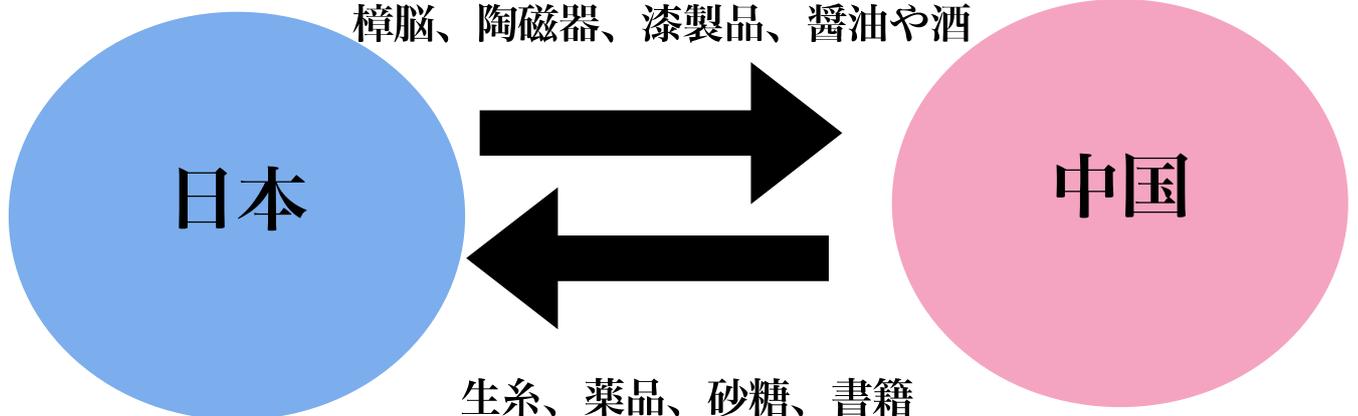


詳説日本史探究 山川出版

4. どんなものが貿易で取引されていたか

銀→金→銅

樟脳、陶磁器、漆製品、醤油や酒



4. どんなものが貿易で取引されたか

長崎（出島）はオランダと中国と交易していたため、2カ国の文化が融合した「和華蘭文化」が生まれました。



5. 江戸時代以降の長崎の貿易と出島

開国後、横浜や函館に港が開港される前までは、国際貿易港としてさらに栄えていきました。

オランダや中国以外のイギリス、フランス、アメリカなどの国とも貿易をしていた時期がありました。

5. 江戸時代以降の長崎の貿易と出島

開国後の1904年の港湾改良工事で、扇形の出島は完全に姿を消した。



長崎しにせ会 第二十三回/出島復元の歴史

<http://www.shinisekai.com/konjaku/no023.htm>

まとめ

長崎の出島は、江戸時代に日本と世界（オランダ、中国）を繋ぐ唯一の玄関口でした。

そのため、様々な文化を形成し今ある文化の基盤を作った土地です。

参考文献

詳説日本史探究 山川出版

長崎市公式観光サイト 江戸時代にタイムスリップ！出島の歴史と現代の楽しみ方 <https://www.at-nagasaki.jp/feature/dejima>
(7月25日閲覧)

出島公式サイト 出島の歴史 <https://nagasakidejima.jp/history/> (7月25日閲覧)

世界史の窓 平戸 https://www.y-history.net/appendix/wh1002-006_1.html (7月22日閲覧)

ナガジン！ 唐人屋敷の生活～唐人屋敷で暮らしてみた！ <https://www.city.nagasaki.lg.jp/nagazine/hakken/hakken1809/index0915.html> (7月25日閲覧)

世界史の窓 長崎/出島/唐人屋敷 <https://www.y-history.net/appendix/wh0801-123.html> (7月25日閲覧)

オランダゆかりの物事典 なぜオランダは鎖国でも貿易できたのか http://www.watv.ne.jp/anne/nl/isolationtrade.html#google_vignette (7月24日閲覧)

これで終わります。

ご清聴ありがとうございました。



長崎の海外交易の歴史について発表します。長崎の海外交易は、出島中心に行われていました。

目次はこちらです。

1. 年表

年表を通して、長崎が海外交易の中心の舞台になるまでを説明します。

1543年、ポルトガル人が種子島に漂着します。

1549年には、フランシスコ＝ザビエルによってキリスト教が伝来されました。

そして、1550年、ポルトガル船が平戸(ひらど)に来航し、南蛮貿易が始まります。

一方、長崎港では、唐船(からふね)が1562年に来航します。これ以降、長い間、中国は長崎港での貿易を独占していきます。

最初の頃は、織田信長も豊臣秀吉もキリスト教に寛容でしたが、大名がキリスト教を通じて力を持ち始めたことを警戒し、

1587年に豊臣秀吉がバテレン追放令を發布し、宣教師に国外退去を命じました。

その後、1600年にオランダのリーフデ号が豊後(ぶんご)に到着し、

1609年には、平戸(ひらど)に商館が建てられました。

この頃、キリスト教の教えが、江戸幕府の支配体制や封建秩序と大きく異なっていることが判明したため、1613年に江戸幕府はキリスト教禁止令を出しました。

2. 出島とは～出島ができたきっかけ～

次に、長崎の江戸時代の貿易の玄関口である、出島ができたきっかけを話します。

出島は、1636年に、ポルトガル人による布教活動や貿易の監視を目的として、江戸幕府が設置した島です。

この島に、ポルトガル人を強制的に移住させ、收容しました。

しかし、1637年に島原の乱が起こります。この反乱は、キリスト教徒が、天草四郎に率いられ、現在の佐賀県と長崎県のあたりで団結し、重い年貢や江戸幕府によるキリスト教の統制をなくすように訴えるために起こしました。これにより、キリスト教を最初に伝来したポルトガル人と江戸幕府の関係が悪くなり、ついにポルトガル人の日本への渡航は禁止されてしまいました。この結果、出島は無人島になってしまいました。

3. 出島の歴史 オランダ

次に、出島とオランダの歴史について話します。

オランダは、江戸幕府とキリスト教を布教しないと約束していました。また、島原の乱で原城(はらじょう)を砲撃(ほうげき)し、反乱の収束に協力するなど、江戸幕府に対して忠誠心を示し、江戸幕府と良好な関係を築いていました。

この頃、長崎の商人は、取引相手だったポルトガル人がいなくなったことで、取引相手に困っていました。商人は、ポルトガル以外の国で特に盛んに貿易をしていたオランダに、出島に移転してほしいと思いました。

また、江戸幕府は、オランダもキリスト教を信仰している国であり、完全に信頼しているというわけではありませんでした。

そこで、商人からオランダ人を出島に移住させてほしいとお願いされた時、表向きは商人の希望を叶え、了承しました。しかし、実は、江戸幕府には、キリスト教の布教防止や貿易の監視という思惑がありました。

1641年、平戸にあったオランダ商館が出島に移転されました。これ以降、鎖国している江戸時代に唯一西ヨーロッパに開かれた島として、1854年に開国(→)するまで出島は西洋文化の玄関口として活躍しました。

3. 出島の歴史 中国

次に、出島と中国の歴史についてお話しします。1635年以降、中国との貿易は長崎港のみで行われていましたが、どこに宿泊するかは自由だったため、中国人たちは長崎市内の様々な場所に宿泊していました。しかし、中国からの船舶による密貿易が増え、江戸幕府が把握しきれないほどになりました。

そのため、幕府は1688年、密貿易を防ぐために出島に唐人屋敷(とうじんやしき)を作り、貿易の監視を始めました。

4. どのようなものが貿易で取引されていたか

次に、オランダと日本が、どのような物を取引していたかを説明します。まずは、オランダが日本との貿易を独占していた、オランダ商館が平戸から、出島に移ってまもなくの時代について話します。日本の輸出品は、最初は銀が主要でしたが、銀の大量流出を江戸幕府が問題視し、金に変更しました。その後、17世紀/末からは、銅の輸出を進め、銅が主要な輸出品となりました。また、陶磁器、漆製品、醤油や酒なども輸出していました。オランダからの輸入品は、生糸が中心で、インド産の木綿製品(もめんせいひん)や毛織物類でした。

その後、日本と中国の貿易が盛んになると、オランダは、中国と輸入品が重ならないように、砂糖を中心に、ビードロ、ギヤマンと呼ばれるガラス細工、陶器、薬種(やくしゅ)、赤色の染料として使用する蘇木(そぼく)や、書籍などを輸入しました。

これは、左からビードロ、ギヤマン、解体新書の写真です。オランダは、多くの新しい西洋文化を日本にもたらしました。特に解体新書などの医学書や薬学の知識は、日本の医学の発展に大いに貢献しました。また、日本の知識人たちに新たな視点を与え、彼らの研究を助けました。

次に、中国がどのようなものを日本に輸出していたかをお話しします。中国は、生糸や薬品、砂糖、書籍などを輸出していました。ちなみに、日本は、オランダと同じものを中国にも輸出していました。

長崎は、オランダと中国という2カ国と貿易をしていたため、2カ国の文化が融合した、和華蘭文化(わからん文化)が生まれました。右下の写真は、和華蘭文化の一例である、長崎くんちというお祭りの写真です。

5. 江戸時代以降の長崎の貿易と出島

次に、江戸時代以降の長崎の貿易と出島について説明します。1854年に開国した後、横浜や函館に港が新たに開港されるまで、国際貿易港として出島はさらに栄えていきました。オランダや中国の他に、イギリスやフランス、アメリカなどの国とも貿易をしていた時期がありました。

開国後の、1904年の港湾(こうわん)改良工事で、扇形の出島は完全に姿を消しました。右下の写真は、現在の出島周辺の様子です。赤枠の部分が出島で、工事の前は島として陸地から離れていました。現在、出島があった位置には小さな模型が設置されているそうです。

最後にまとめです。

長崎の出島は、江戸時代に日本と世界を繋ぐ、唯一の玄関口でした。そのため、さまざまな文化を形成し、今ある文化の基盤を作った土地です。このことは、この後の文化や思想や学問の発展に大いに寄与しました。

参考文献はこちらです。

これで終わります。ご清聴ありがとうございました。

長崎名物・名産品について

長崎の自然・歴史・文化を調べてみよう

長崎の名産を育んだ歴史と文化

長崎は昔から外国との交流が盛んで、独自の文化が育まれてきました。その歴史が今も名産品にも色濃く反映されています。

- 室町時代に長崎港が開かれて以来、外国との交流が続いている
- 江戸時代、日本で唯一、外国との貿易が許されていた場所
- アジアやヨーロッパの文化が名産品などにも影響している
- 特に、中国、ポルトガル、オランダの文化が影響した料理が多い
- 島が多く、各々の島で独自の文化が発展した
- 漁業が盛んな為、魚介類を使った料理や水産加工品が豊富

長崎名物～歴史と異文化の味わい～

長崎は歴史的な外国交流や多様な文化の影響を受け、様々な名産品が育まれました。代表的なものをいくつかご紹介します。

1. カステラ

- ポルトガルから伝わった伝統的な洋菓子。長崎の代表的な銘菓。

2. ちゃんぽん

- 中国福建省の料理がベース。長崎独自にアレンジされ、人気の麺料理。

3. 皿うどん

- ちゃんぽん同様、中国の影響を受けた揚げそば料理。

4. からすみ

- 中国由来の高級珍味。長崎の魚介を使って作られる。

5. 卓袱料理

- 江戸時代に中国、オランダ、ポルトガルの影響を受けた多彩な宴席料理。



カステラ



- ポルトガルから伝わった南蛮菓子
- 室町時代、キリスト教の布教とともにポルトガル人によって伝わった
- 江戸時代初期から盛んに作られるようになり、独自に発展しながら和菓子として定着した
- もとは、現在のスペインにあったカスティーリャ王国のものであることが名前の由来
- しっとりとした甘さと素朴な味わいが特徴

ちゃんぽん



- 中国福建省からの移住民が生んだ長崎ソウルフード
- 豚骨や鶏ガラスープに、豚肉、魚介類、野菜をたくさん使った麺料理
- 明治時代、長崎市内で中国料理店を営んでいた中国人が、留学生のために安くて栄養のある料理を食べてもらいたい、と考案したのが始まり
- 異文化と地元の食材が融合した料理

卓袱料理



- 卓袱と呼ばれる中国風テーブルに、大皿に盛った料理を並べ、大人数でとりわけながら食べるもの
- 江戸時代、海外との交流があった長崎で発展した大皿料理で、和洋中の料理が1度に並ぶのが特徴
- 东坡煮（豚の角煮）などが代表的
- 格式がありながらも家庭的な温かさを持つ、長崎ならではの食文化

長崎県の現状

～長崎県の基本情報～

人口→約 120 万人

面積→約 4000 km²

世界遺産→明治日本の産業革命遺産，長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産

長崎県章→長崎の頭文字と平和の象徴のハートの形になっている



～長崎県での平和活動～

終戦から 4 年後、長崎市長が「平和宣言」を発表した。平和公園のシンボルとなる「平和祈念像」が建てられた。

毎年 8 月 9 日には平和公園で長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が行われ、原爆犠牲者の冥福を祈るとともに、核兵器廃絶と恒久平和の実現が世界に向けて発信されている。前日の 8 月 8 日には「平和のともしび」が行われ、長崎市民が手作りのキャンドルに平和への願いを書き入れ明かりを灯し、原爆死者を慰霊する。



はじめに

1945年8月9日午前11時2分、長崎市に原子爆弾が投下され、数万人が一瞬で命を奪われた。この原爆投下は、単なる軍事的な判断だけではなく、当日の天候や現場での判断、偶然の積み重ねによって決まったものであった。ここでは、長崎に原爆が投下されるまでの背景と経過を、できる限り詳しく調べてまとめる。

原爆投下の背景

アメリカは第二次世界大戦の終結を早めるため、マンハッタン計画で原爆を開発した。1945年7月26日には、アメリカ・イギリス・中国が「ポツダム宣言」を発表し、日本に無条件降伏を求めたが、日本政府はこれを黙殺した。この対応を受け、アメリカは原爆の使用を決定し、最初の目標として広島が選ばれ、8月6日にウラン型原爆「リトルボーイ」が投下された。しかし日本は降伏せず、2発目の使用が計画され、プルトニウム型原爆「ファットマン」が準備された。

原爆投下までの経過

原爆投下までの経過

8月9日未明、B-29爆撃機「ボックスカー」がテニアン島を出発。目標は小倉市だったが、煙と雲で視認できず断念。燃料が減る中、副目標の長崎へ進路を変えた。到着時も雲が多かったが、浦上地区で一瞬雲が切れ、午前11時2分、プルトニウム型原爆「ファットマン」が投下された。爆心地は浦上天主堂の北西約180m、上空約503m。1945年末までに約74,000人が亡くなった。

<図1：原爆投下ルート>

テニアン島（出発）



小倉（第一目標）→ 煙と雲で断念



長崎（第二目標）→ 雲の切れ間から目標確認、投下

<図2：爆心地と被害範囲>

爆心地：浦上天主堂の北西約180m

爆発高度：約503m

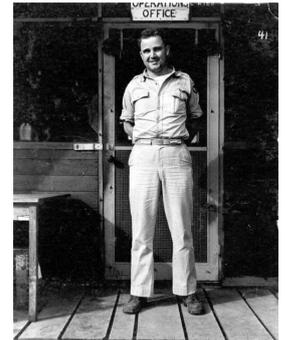
死者：約74,000人（1945年末まで）

[被害イメージ]

- ◎ 半径1km：壊滅（木造家屋のほぼ全てが消失）
- ◎ 半径2km：重度損壊（火傷・重傷多数）
- ◎ 半径3km以上：破片・放射線による被害



↑テニタン島の位置図



←チャールズ・スウィニー機長

長崎原爆の物理的被害について



長崎の原爆は8月9日アメリカのB29が上空9000mから投下された。その後、10秒で中心地近くを壊滅した。

主な物理的被害

- 爆心地: 松山町上空503m
- 全壊地域: 爆心地から半径約1.5km
- 半壊地域: 爆心地から半径約2.5km
- 火災範囲: 爆心地から半径約3.5km
- 家屋: 長崎市内の約92%が半壊以上の被害を受けた

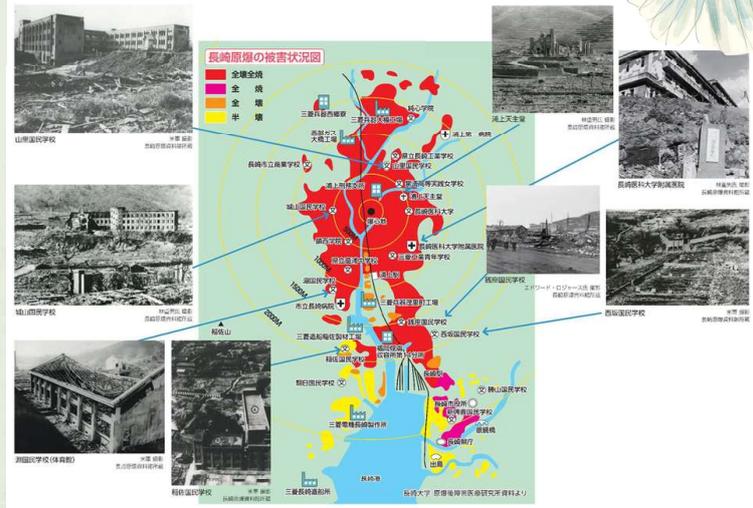
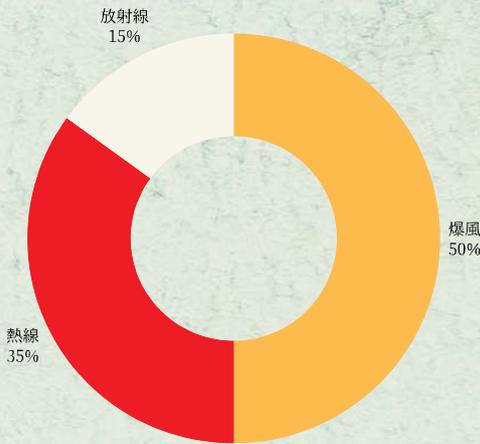


図1：長崎原爆の被害状況（キッズ平和長崎より）

原子爆弾エネルギー

長崎に落とされた原子爆弾はTNT、21kt分に相当する。このような膨大な威力を持ったため、エネルギーは爆風、熱線、放射線の三つとして放出された。

図2：原子爆弾エネルギー割合



爆風は家屋の屋根を破壊したり、建物を吹き飛ばすような威力を持っていた。全壊地域が広がった理由となった。

放射線により、急性放射線障害や火傷、怪我の原因となった。また、「黒い雨」という放射線物質が雨と共に降ってくるなどが起きて、急性放射線障害の被害を広げた。当初は爆心地から北西部の特定の範囲とされていたが、近年ではそれ以上に広範囲に降ったことが、その後の調査で明らかとなった。

熱線は広い範囲を焼け野原とした。落とされた時の温度は100万度になり、10秒後には消滅した。急雨撃に温度が上がることで「キノコ雲」と呼ばれる大きな雲が見られた。火災範囲はその後にも広がり、多くの人が焼け死んだ。

物理的被害の具体例

山王神社

山王神社には原爆前は一の鳥居から四の鳥居までであったが、原爆投下の爆風により三の鳥居と四の鳥居が破壊された。二の鳥居は半分だけが吹き飛ばされた。現在も当時のままの姿で二の鳥居は立っているが原爆の前後で原爆の影響の大きさがわかる。



写真1：原爆後の三王神社



写真1：原爆前の三王神社

参考文献

- Atomic Bomb Disease institute, Nagasaki University. 「長崎原爆の物理的影響」 Nagasaki-U.ac.jp, 2025. www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abomb/peffect_j.html. 閲覧2025年7月30日
- 朝日新聞. 「長崎の声 - 広島・長崎の記憶～被爆者からのメッセージ - 朝日新聞社」 www.asahi.com, www.asahi.com/hibakusha/nagasaki/n02-00010j.html. 閲覧2025年7月30日
- 山王神社. 「山王神社の被爆の話」 山王神社(山王日吉神社/浦上皇大神宮)公式ウェブサイト. 山王神社. 2 Aug. 2025. sannou-jinjya.jp/pages/177. 閲覧2025年7月30日
- 長崎市被爆継承課. 「キッズ平和ながさき」 キッズ平和ながさき. 2021. nagasakipeace.jp/reference/materials/kids/commentary/higaimap.html. 閲覧2025年7月30日
- 「原爆の威力」原爆の惨状 | 長崎の原爆 | 調べる | ながさきの平和【公式】. ながさきの平和, 2023. nagasakipeace.jp/search/about_abm/scene/iryoku.html. 閲覧2025年7月30日

長崎原爆による人的被害

爆発直後

1 km以内…強力な爆発圧力および熱気、熱線によってほとんど即死。

熱傷を負った者のおよそ 96.7%は死亡

外傷（熱傷を除く）を負った者のおよそ 96.9%は死亡

※無傷の者のおよそ 94.1%は死亡

※ここでいう無傷の者の死因は、放射能による細胞レベルの内臓障害である。

熱気…温度の高い気体・空気のこと

熱線…人に触れたとき熱くなる電磁波

1.2 km以内…熱線だけで致命傷を負う者が多数。

さらに、倒れた家の下敷きになり、火災で亡くなった者も極めて多い（下図参照）。

2 km以内…強力な爆風および熱気、熱線によって一部は即死し、大部分は重軽傷を負う。

4 km以内…強力な爆風にとまなう飛散物によって一部重軽傷を負い、熱気により一部は火傷を負う

8 km以内…爆風にとまなう飛散物によって一部軽傷を負う。

原爆投下から数十年後

①放射線は人体の奥深くを傷つけ、時が経つにつれて様々な症状を呼び起こす。

例) 多数のがん（甲状腺がん、乳がん、胃がん、多重がんなど）や白血病など。

②精神的影響に苦しむ人も少なからずいる。

- ・めまい、意識喪失、頭痛、吐き気、体の一部が動かないなどの身体的症状
- ・PTSD やトラウマ、反応性の低下、罪悪感、うつ病などの精神的症状

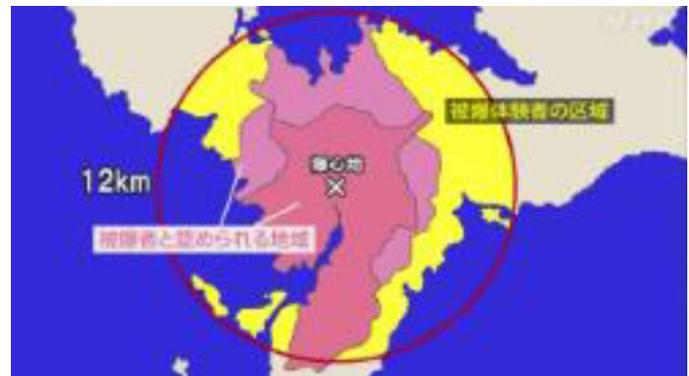
など、人によって症状は違うものの、原爆による精神的被害は多数報告されている。

③それらが発展し、いじめや差別などになることもある。

→「放射線を浴びたから」などという理由で差別されたり、「放射能は伝染する」というデマにより避けられたりするなど。

参考文献

<https://nagasakipeace.jp/>
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240909/k10014576901000.html>
<https://nabmuseum.jp/genbaku/tenji/higai/>
https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abomb/review_j.html
<https://www.asahi.com/hibakusha/others/komine/komine-010j.html>
https://www.ref.or.jp/programs/roadmap/health_effects/late/psycholo/
<https://nagasakipeace.jp/reference/materials/kids/higai.html>
<https://www.asahi.com/hibakusha/others/komine/komine-010j.html>



原爆の被害について

～広島と長崎に落とされた原爆の違いはあるのか～

- ・広島と長崎に落とされた原爆には構造や威力、核物質の違いがあります。

・広島に落ちた原爆

名前→リトルボーイ

核物質→ウラン 235



構造→筒状のウラン火薬で打ち出して臨界量に達させる「ガンバレル型」

威力→長崎に落ちた原爆よりは威力が弱い

・長崎に落ちた原爆

名前→ファットマン 核物質→プルトニウム 239

構造→球状のプルトニウムを火薬で圧縮して臨界量に達

される「インプロージョン型」

威力→広島に落とされた原爆よりも威力は強い



・被害の大きさ

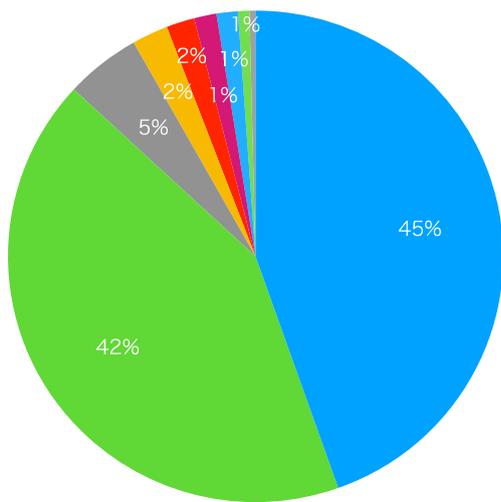
広島では14万人、長崎では7万人が死亡。長崎の原爆は威力が強かったの

に被害が少なかったのは、山が多い地形だったため爆心地から離れた場所に

熱戦や衝撃波が届かなかったから。

世界の核兵器の保有数について

● ロシア ● アメリカ ● 中国 ● フランス ● イギリス ● インド
● パキスタン ● イスラエル ● 北朝鮮



・昨年と比べて世界全体の核兵器数は164個減ってはいるものの、変わらず全体の約90%をアメリカとロシアが保有している。

・インドの核兵器数は全体に占める割合は大きくないものの、年々保有数が少しずつ増えてきている。

・中国の核兵器は他のどの国よりも急激に増加している。これからも増える見通し。

世界の核兵器保有数（2025年1月時点）

国名	配備核弾頭	貯蔵核弾頭	解体待ち核弾頭	核兵器数	核兵器数前年比
ロシア	1,718	2,591	1,150	5,459	↓121
アメリカ	1,770	1,930	1,477	5,177	↓151
中国	24	576	-	600	↑100
フランス	280	10	-	290	±0
イギリス	120	105	-	225	±0
インド	-	180	-	180	↑8
パキスタン	-	170	-	170	±0
イスラエル	-	90	-	90	±0
北朝鮮	-	50	-	50	±0
合計	3,912	5,702	2,627	12,241	↓164

参考：広島市公式ホームページ

※中国・インド・パキスタン・イスラエル・北朝鮮の値は正確な数値が公開されておらず、推定値

～核兵器不拡散条約(NPT)とは？～

・核兵器の拡散を防いで、原子力の平和的利用を促進することを目的とした国際条約で、国連加盟国のほとんど(191カ国)が加盟している。米・露・英・仏・中の五カ国を「核兵器国」と定め、それ以外の国の核兵器の製造・取得・保有を禁止している。核兵器の拡散を防止して世界の平和を維持する上で重要な役割を果たしているが、一部の国（インド・パキスタン・イスラエル・北朝鮮・南スーダン）が条約に加盟しておらず核を保有していることが課題となっている。また、核保有国への核軍縮交渉が進んでいないことも課題の一つである。

参考：広島平和研究所HP

世界の核廃絶への 取り組みについて

2 グループ 中学1年生 加藤 慧

☆ican について



Oican とは

ican とは世界の NGO（非政府組織）が集まってできた組織です。

ican は 2007 年に発足し、およそ 650 の NGO が参加しています。

ican は核の事を世界中の会議で話してもらったり、政府関係者に会議に出席してもらうように呼び掛けています。 どうしてこんなことが可能かというところ ican には世界の NGO が所属しているため、世界中にネットワークを持っているからです。

このように、様々な活動を通して ican はノーベル平和賞をうけました。

それは世界の NGO やそれにかかわるすべての人に送られたようなものです。

Oican が取りくんでいること

ican の最終的なゴールは 「核兵器をゼロにすること」 です。

そのため、ican は 核兵器禁止条約に参加する国をもっと増やすための活動をしています。 その活動をもっと知ってもらうためには核兵器の恐ろしさを知ってもらうことが大切です。

そこで、日本の NGO のひとつであるピースボートは被爆者の方々と海を渡って世界各国の人々に核兵器の恐ろしさを伝えています。

しかし、コロナかによって船でいくことが困難になってしまい、オンラインで行うことにしました。オンラインならば海のない国にでも、どの国でも行けるため、よりいっそう世界各国の人々に伝えることができます。

また、ican は都市単位で「私たちの街は核兵器禁止条約に賛成します」という宣言（シティー・アピール）を出してもらうように働きかけています。

現にワシントン D、C、やロサンゼルス、パリなどがシティー・アピールを出しています。このようにして地方議会などから「私たちの国も核兵器禁止条約に参加するべきだ」という意見が出てきたら国もそうした声を見えなくなるはず

です。
また、（2021年7月1日現在は）165か国、8037都市が参加する平和首長会議には武蔵野市も参加しています。

☆非核地帯について

実は世界には核兵器をなくすことに成功した地域があります

最初に成功したのは中南米です。実際に中南米には核兵器を持っている国がひとつもないです。

その理由は

「中南米の地域では核兵器を作ることや持つことを禁止する」

というラテンアメリカおよびカリブ核兵器禁止条約に参加しているからです。

また、中南米は核を保有する五か国と粘り強く話し合い、

「核兵器を持っている国も中南米の国々にたいしては使わない」という文をいれました。

また、他の非核地帯においては

・ 中央アジア非核兵器地帯条約

(発効・・・2009年,地域の批准国・・・ウズベキスタン他計5国

核保有五か国の参加・・・露、英、仏、中)

・ 東南アジア非核兵器地帯条約

(発効・・・1997年 地域の批准国・・・インドネシア他計9国

核保有五か国の参加・・・なし)

・ 南太平洋非核地帯条約 (発効・・・1986年 地域の批准国・・・オーストラリア他計16国 核保有五か国の批准・・・露、英、仏、中)

・ ラテンアメリカおよびカリブ核兵器禁止条約 (トラテトルコ条約)

(発効・・・1968年 地域の批准国・・・中南米33か国すべて

核保有五か国の参加・・・露、米、英、仏、中)

・ アフリカ非核兵器地帯条約

(発効・・・2009年 地域の批准国・・・ナイジェリア、マリ他計54国

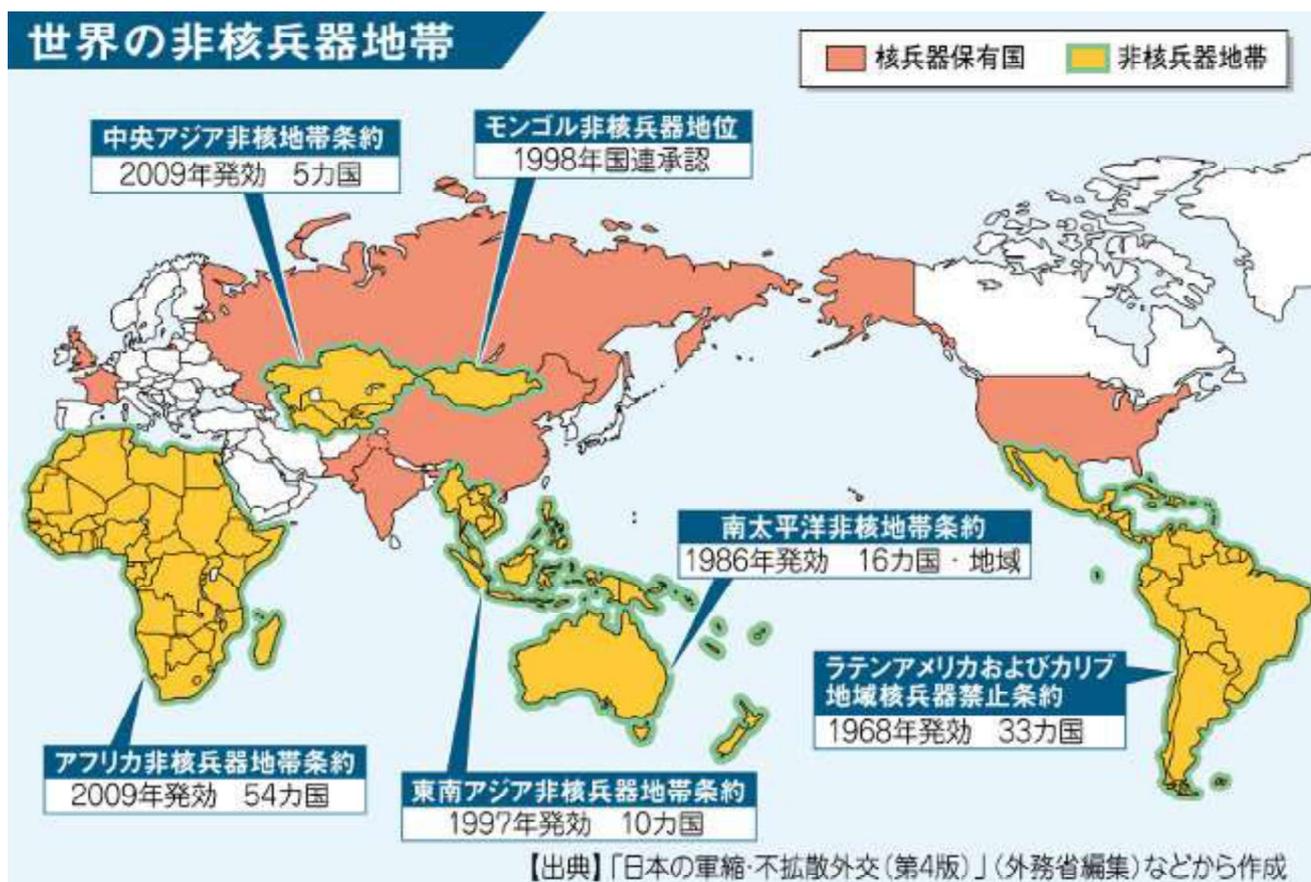
核保有五か国の参加・・・露、英、仏、中)

の5つがあります。

また、モンゴルは一国で非核地帯と認められています。

ラテンアメリカおよびカリブ核兵器禁止条約とほかの4つの条約で大きく違うことは

核保有五か国が（特にアメリカ）すべて参加しているか、参加していないかです。アメリカがこれらの非核地帯条約に参加した時本当に「核兵器がなくなった」といえます。



出展

- ・川崎哲 2021 「核兵器禁止から廃絶へ」 岩波書店
- ・川崎哲 2018 「核兵器を禁止する」 岩波書店
- ・川崎哲 2021 「絵でみてわかる 核兵器禁止条約ってなんだろう？」 旬報社
- ・瀬川高央 2019 「核軍縮の世界史 北朝鮮、ウクライナ、イラン」 吉川弘文館
- ・川崎哲 2018 「核兵器はなくせる」 岩波ジュニア新書

日本の核兵器廃絶の取り組み

広がる核廃絶の動きと原子力を受け入れた日本から考える

8月4日 第3回学習会 小出結貴



はじめに

- ・核兵器…核分裂を利用して爆発的なエネルギーを放出する兵器の総称
- ・日本は世界唯一の被爆国→核兵器廃絶への責務がある
- しかし今日の国際社会には**様々な問題が…**

核兵器国と
非核兵器国

新興国の
経済成長

新技術の登場による
民間技術の軍事転用

**核の脅威・拡散リスクは
増大傾向**

そんな状況でも日本がすべき取り組み

- ①国際的な不拡散体制、ルール維持
- ②国内での不拡散措置の実施
- ③各国との緊密な連携

国内での取り組み



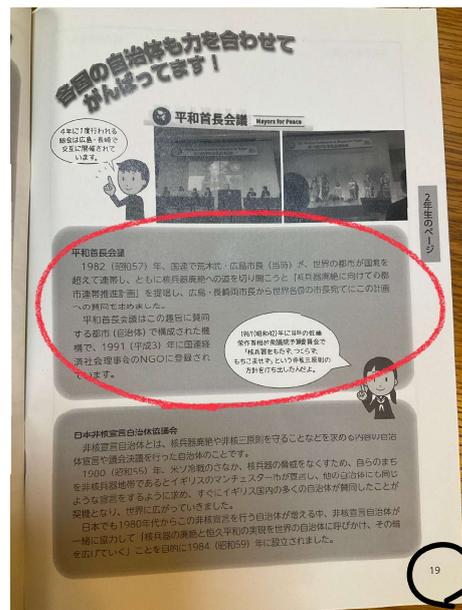
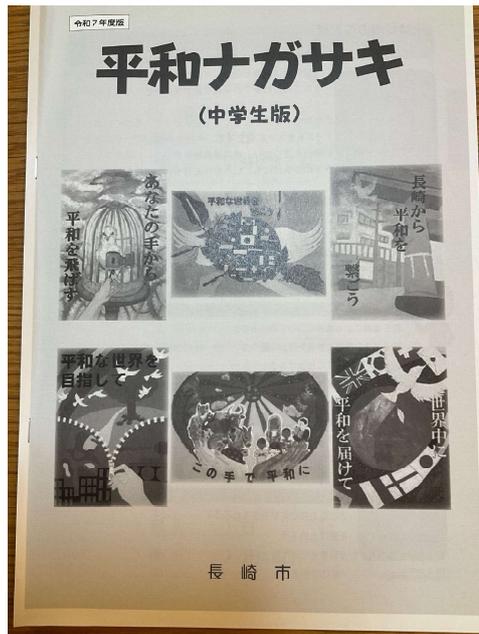
- ・国内での原爆展
- 被曝の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた世論を作るため
- ・「2020ビジョン」
- 平和主張会議などを通じて策定された核兵器廃絶を目指す行動指針

広島、長崎による核兵器廃絶のために世界と連帯しようという会議



・市民団体と連携して様々な活動を展開

国自体でも、自治体でも、個人でも
様々な取り組みを行なっている



P19

長崎での取り組み



★被爆地としての使命を果たすため、様々な取り組みを行っている

①平和宣言や平和記念式典でのメッセージ発信

②平和活動支援

例)高校生平和大使など→次世代の平和活動を応援！

③被曝資料の収集、保存、活用、人材育成

- ・長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)など、核兵器に関する研究をする施設なども



国連を通じた取り組み



- ・1994年～、核兵器廃絶に向けた決議案を国連総会に提出
- ・2023年の決議案では「ヒロシマ・アクション・プラン」が多くの国の賛成によって採択。→核兵器用核分裂性物質生産禁止条約「FMCT」

ではなぜ世界にはまだ核が大量にあるのか??

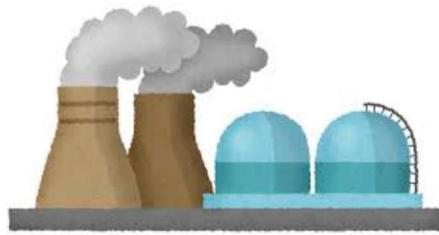
核は戦争用に用いられるだけではない。→持っていることで軍事力のアピールに。

例)冷戦の時代、超大国アメリカ・ソ連

→世界が二分化される中、各地で紛争が起きる。

やがて、核兵器は覇権争いの切り札として使われるように。お互いを牽制しあい、その緊張状態を維持することで戦争を避ける。

あなたは原子力発電を知ってる？



原爆と原子力

	原爆	原子力
目的	破壊(戦争)	平和利用…発電など
使い方	一瞬で放出	コントロールしながら使う
例	広島、長崎の原爆	放射線治療、原子力発電

それでも、同じ原理で作られたもの。

(20人回答)

→当時の人々が受け入れるか？

→原子力=平和は誤りでは？

→被爆国としての立場と矛盾しているのでは？



原爆を受け入れた日本

①戦後のエネルギー不足

- WW II後、石炭や石油などのエネルギー資源がほとんどなかった
- 経済復興のために新しいエネルギー源が欲しい

②平和利用というアメリカの戦略

- 「Atoms for Peace」という考えを展開
- アメリカの影響力を世界中に広めたい

③政治と経済の後押し

- 1955年、日本政府は「原子力基本法」を制定。

1945年



2025年

時代の変化

私が思ったこと

- 日本は世界唯一の被爆国として核廃絶のため様々な取り組みを行っている。その中でも、若い世代へ平和活動支援などはこれからの世界でも平和を訴えるための尊い支援だと思った。
- 原子力は「便利だけど刃物みたいな道具」だと思った。使い方を間違えれば、大事なものを失う。
- 核兵器を人間がどう扱うかは、考えていくべきテーマ。
1人でも多くの人が平和について向き合っていて欲しいなど自分自身も今回の学習会の準備を通して心から思った。



ありがとうございました！！

核の平和利用は実現可能なのか

伊藤千夏

1.はじめに

「核」と聞くと、多くの人がまず思い浮かべるのは、原子爆弾や核兵器などの破壊する力と思われがちだ。しかし、核のエネルギーは人類の生活をより豊かにするためにも使われている。

核エネルギーは、ウランやプルトニウムなどの原子核が分裂する時に発生する膨大な熱エネルギーを利用する。このエネルギーは、火力発電のように水を蒸気に変え、タービンを回して電気をつくるなどの方法で利用することができる。

今回はこのようなエネルギーはどういった利用ができるのか考える。

2.主な活用例

a.原子力発電

最も代表的な平和利用の例が、原子力発電だ。日本をはじめ、多くの国が電力の一部を原子力でまかなっており、二酸化炭素を出さないため、地球温暖化対策の一つとしても注目されている。

b.医療分野

放射線は、がん治療や検査（PET検査、X線など）に使われている。がん細胞をピンポイントで攻撃する治療など、医療の進歩にも核技術は大きく貢献している。

c.農業・工業分野

食品の殺菌、種子の突然変異による新品種の開発、製品の品質検査（非破壊検査）などでも、放射線が活用されている。

3.核の利用の課題

a.事故の可能性

2011年の福島第一原発事故のように、原子力発電には大きなリスクがある。一度事故が起きると、放射能汚染や避難など、多くの影響が長期間にわたって続く。

b.廃棄物の処理

原子力発電の後には「放射性廃棄物」が残る。これらは数万年もの間、有害な放射線を出し続けるため、安全な処理と管理が必要である。

c.核拡散の懸念

平和利用の名のもとに核技術が広がることで、核兵器への転用が懸念されることがある。そのため、国際的な監視や協力が必要といえる。

4.おわりに

核のエネルギーは、その使い方次第で人々の暮らしを豊かにも、破壊することもできる。だからこそ、私たちは「平和利用」という視点を常に持ち、正しく、安全に利用していく必要があるといえるだろう。未来を生きる私たち一人ひとりが、エネルギーのあり方について考えていくことが大切だ。





平和交流派遣を終えて



最近、スマホを見ていると、ウクライナ戦争やガザ地区での戦争、アフガニスタン紛争の光景が目に入る。戦争は歴史の中のものではないという実感がそれと共に沸く。戦争に行って亡くなる兵隊、飢餓で死んでしまう子供たち、同じ地球に住んでいる人として戦争を体験していない私も無関係ではない。そのため、私は「青少年平和交流派遣団」に参加し、自分にできる、知識をつけること、知識を発信すること、戦争について考え続け、行動することの第一歩を踏み出そうと思った。

青少年ピースフォーラムの一日目の戦争の疑似体験は衝撃的だった。これまではビデオや写真、実体験を聞くという形で、どうしても第三者の目線からしか戦争について学んでこれていないことに気づいた。疑似体験では、眩しい光と大きな音、鼓膜が割れないように、目が飛び出ないようにして伏せる姿勢を体験し、初めて第三者ではない人としての言葉では表せない恐怖や困惑の感情を覚えた。実際の戦争は疑似体験とは比にならないくらいの気持ち、痛みを人々に与えると考えるとやはり戦争は起きるはならないと強く思った。

ピースボランティアの方ともお話ができた。高校生のピースボランティアの方は長崎の学校生活や行事について教えてくれた。小さい頃から毎年何度も平和学習をやってゆくにつれて自然と平和について考える習慣がついたという。戦争に関しての資料館や記念碑、戦争の経験を聞ける機会が多くある長崎だからこそ、平和との関わり方があると感じた。どこに住んでいても同じように自然と興味・関心が戦争や平和へつながる環境づくりをしていってほしいと思う。

私は戦争と平和について多くの知識と教科書では得られない知恵、一緒に3日間を過ごし、仲を深めた仲間を得られた。戦争のこと、平和のこと、すべてを私ごととしてこれからも探究し続け、周りにも発信していきたい。



僕は「武蔵野市青少年平和交流派遣団」の一員として長崎を訪れました。これまで授業や本などで戦争や原爆について学んできましたが、どこか遠い出来事のように感じていたのも事実です。けれど実際に長崎の地を歩き、資料館や被爆遺構を見たとき、その重さが現実として心に迫ってきました。

原爆資料館で目にした焼け焦げた弁当箱や衣服は、当時の人々の普通の生活が一瞬で奪われたことを物語っていました。展示品を見ながら、自分と同じように家族や友達と過ごしていた若者や子供が突然命を落としたのだと思うと、言葉を失いました。戦争の悲惨さを知識ではなく実感として受け止めることができた瞬間でした。

平和祈念式典では、多くの人々と共に黙とうを捧げました。静かな空気の中で響いた鐘の音と、長崎市長の「平和は決して当たり前ではなく、分断をこえて協力する姿勢が必要だ」という言葉が心に残っています。世界のニュースで目にする戦争や対立は、決して遠い国の話ではなく、自分たちが向き合うべき課題なのだと感じました。

青少年ピースフォーラムでは、全国から集まった同世代と意見を交わしました。「戦争はなぜ起こるのか」「平和のために自分たちに何ができるのか」という問いは難しく、答えは簡単に出ませんでした。真剣に語り合う中で、自分の考えを深めることができました。立場や考えが違って、平和を願う気持ちは同じであり、その思いを共有できたことは大きな励みになりました。

今回の派遣を通じて、僕は「戦争体験を直接聞ける最後の世代」であることを意識しました。学んだことを自分だけにとどめず、まずは家族や友人に伝えることが、僕にできる最初の一步だと思います。小さな行動でも、積み重なれば必ず意味を持つと信じています。

「平和」とは「何気ない日常や大切な人との時間」です。その尊さを忘れず「微力でも無力ではない」という言葉を胸に、これからも自分なりに考え、行動し続けたいと思います。



私は今回「青少年平和交流派遣団」で長崎を訪れ、戦争や平和について深く考える貴重な体験をしました。長崎といえば原爆投下の地として有名ですが、実際にその場に立ち、資料や戦争を体験した人たちの証言をうかがうと、教科書で学んだ知識とは全然違う重みがありました。平和公園や原爆資料館では、被爆当時の街の様子や人々の生活がリアルに伝わってきて、戦争が「昔の出来事」ではなく「実際にあった出来事」ということを強く感じました。

特に印象に残ったのは、被爆体験者の方々から直接お話をうかがえたことです。言葉に重みがあり「二度と同じ悲しみを繰り返してはいけない」という願いが心に響きました。今の自分がこうして平和な日常を過ごせているのは、多くの犠牲の上に成り立っているのだと改めて気づかされました。

また、全国から集まった同世代の子たちと交流できたことも楽しくて学びになりました。それぞれの地域で平和についてどう考えているのか意見を交換する中で、自分の考えを言葉にする難しさと大切さを実感しました。違う視点に触れることで「平和＝戦争がないこと」だけではなく、日常の人と人との関わりや思いやりの積み重ねが平和につながるのだと感じました。

今回の派遣で得た経験は、一度きりの思い出ではなく、これからの自分の行動に活かしていきたいと思います。例えば学校や地域で学んだことを共有したり、身近な人との会話で平和について考えるきっかけを作ったりすることができると思います。

長崎で過ごした時間を通じて、平和の大切さを「知識」としてではなく「実感」として心に刻むことができました。この経験を忘れずに、未来を担う世代の一人として、平和を守るために何ができるのか、考え続けていきたいと思っています。



私は実際に長崎に行くまで、戦争を「自分とは関係のない話」だと思っていた。事前学習会で戦争や原爆について話を聞き、知識を深めたが、それでもどこか他人事のように感じていたように思う。

しかし、実際に長崎に行き、ピースフォーラムに参加したり、原爆落下中心地の周辺を見学したりする中で、その考えは変わっていった。なかでも印象に残っているのは、原爆資料館の見学だ。黒焦げになった人の写真を見て「これが自分の大切な人だったら…」と考えた。こんな状態になってしまった家族を見て、私はどう思うのだろうか。「かわりに自分が死ねばよかった」と、絶望しながらそう思うだろう。もし仮に生き残れたとして「なんで自分は生きて、家族は死んでしまったんだ」と罪悪感に駆られるはずだ。亡くなった方の着ていた衣服を見て、80年前に思いをはせた。80年前、確かにこの服を着ていた人は、一発の爆弾によって亡くなった。そのことを、嫌でも実感した。

今、ロシアとウクライナをはじめ、各地で戦争が起こっている。日本も安全だとは言いきれない。戦争を起こさないためには、どれだけの人が「戦争は絶対にしてはいけない」と思うかが大切だと私は思う。この平和交流派遣団で感じたことを周りの人に伝え「戦争は絶対にしてはいけない」という気持ちを、一人でも多くの人と共有していきたい。



私は、以前から平和実現に関する個人的な興味があった。書籍やインターネットなどを使用して調べることはもちろん、博物館に資料を見に行ったり、実際に空襲を体験した人などからお話を聞いたりもした。だが、想像力の乏しい私は、直接体験者の方にお話を聞くこと以外で、戦争に対するリアリティを感じる事ができなかった。文字や写真といった非現実的なものとして戦争を捉えることしかできないのであった。

終戦から80年を迎えた今、戦争を語り継ぐ人は減少し続けており、今後どのような戦争を語り継いでいくのか、問題視されている。私はこの問いにずっと悩まされていた。

長崎を訪れてから2日目。平和記念式典が始まる前に、原爆によって亡くなった方の手記の朗読を聞いた。たかが手記の音読、と思っていた私は朗読を聞いて大きな衝撃を受けた。戦争の恐怖がリアリティを持って、ひしひしと伝わってきたのだ。経験したことのない戦争が身近に感じられてしまった。他のものと比べて、主語が「私」になったことが一番大きな違いだと思う。とにかく、戦争の恐怖がはっきりと伝わってきた。

手記の朗読は、手記が残り続ける限り、これから先何年でも行うことができる。平和追悼記念館にはたくさんの手記が並べられている。手記の数だけ、戦争の恐怖を感じることができる。普段、身近な存在として感じる事の出来ない戦争を知るためにはリアリティが必要である。手記の朗読は今後の平和実現に向けて大きな影響をもたらすだろうと感じた。



私たちの過ごす当たり前の日常。いつも通りの風景。しかし80年前に遡ってみれば、そこには戦争によって癒えぬ傷を負った長崎と日本の姿があります。そして実際に「被爆地の長崎を自分の目で見てみたい」、そんな思いで私はこの派遣団に参加しました。

戦後80年という節目で迎えた平和祈念式典では、映像越しではありますが非常に荘厳で厳粛な雰囲気を感じました。被爆者への哀悼の意や核廃絶を訴える長崎平和宣言などでは思わず冷たい水を浴びたような気持ちになりました。改めて、戦争の悲惨さと平和の尊さを強く感じたのです。また、平和を願った歌の数々の音色はとても美しく、心を打たれました。

青少年ピースフォーラムでは、水色のTシャツを着たお兄さんお姉さん、通称「ピーボ」の人たちとの会話を通してたくさん学びました。例えば、あるお姉さんは曾祖父が被爆者だったようで、幼い頃から戦争について何度も学んできたと言ってくれました。同じ日本人でも、東京で生まれ育った私にはどこか違う世界にいるような感じがしました。

大切な家族の中に被爆者がいる、それがどんなに悲しく、やるせない気持ちにさせるものなのか私にはわからない。けれど、知ることができました。戦争の歴史を一步、深く考える理由になりました。

こんなふうに、実際に現地に赴くからこそ得られる貴重な体験がありました。私は「戦争について、そして平和についてさらに学ぼう」という気持ちを生み出しました。これからも、確かにあった歴史から目を背けず、知り、思い、学んでいきたいと思えます。

「平和な世界になりますように。」

幾多使われた言葉でしょうか。それでも、長崎派遣を通してそう願わずにはられません。最後に、今回の派遣に関わってくださった方々、3日間一緒に過ごしてくださった皆さんへの感謝で締めくりたいと思えます。



私は今回の長崎訪問で考えたことがある。それは、私たちは「被害者」ではなく「戦争をしてしまった国」であるということだ。

アメリカが二発の原子爆弾を落として日本に甚大な被害が出た。その事実を知った時、多くの人は日本人を「被害者」と見るだろう。もちろんそれは間違っていないし、過去に受けた被爆の現実は知らなければならないことだ。だが、私たちの意識は「被害者」でいいのだろうか。

「日本に原爆を落とした戦闘機『エノラ・ゲイ』という名前はパイロットの母親の名前からとられている」原爆資料館で見たその一文が私の見方を大きく変えた。今まで、私は戦時中のアメリカを日本に非人道的な行為をした国としか見ていなかった。だが、原子爆弾を落としたパイロットも一人の人間であり、愛する家族がいたのだ。

また、アメリカに住んでいる親戚に長崎訪問のことを報告すると「アメリカでは原子爆弾を落としたことは終戦のためだったという考えが根強い」という返事が返ってきた。私はそれを聞き衝撃を受けた。もちろん「終戦のため」という理由は原子爆弾投下への言い訳にはならないし、してはいけない。ただ、アメリカ側にも考えがあったのだということも知っておくべきだと思う。そのうえで、アメリカの人々の考えが、もう原爆投下を繰り返してはいけないという方向へ変化するように何か行動をするべきではないか。

日本に原爆が落とされ「大きな」という言葉では表しきれないほどの被害が出た。その事実を次の世代に受け継いでいくことも大切だが、日本とアメリカ双方の立場を踏まえて考えさせることも大切だと私は思う。日本が戦争をし、他国の人々を殺してきたという事実から目を背けずに、世界唯一の被爆国として、戦争という過ちをおかしてしまった国として「原爆の被害は凄惨なものだった」と伝えるだけでなく「戦争を二度と起こさない」ということに国をあげて尽力していくべきだと思う。



僕は長崎の派遣事業を通して、一番平和への考えを強められたのは「青少年ピースフォーラム」だ。

一日目は、被爆体験者である三瀬さんのお話をうかがう貴重な機会があった。

そのなかで特に印象に残ったのは「戦時中は栄養になるものが常に不足していたため、ハチの巣の中のハチの卵がご馳走のようなものだった」というものである。「戦争」がなければ、子供たちが命を落としたりこんなひどい思いをしたりすることがなかったのに」と聞くと、僕は悲しいと同時に悔しくもなってきた。また、僕は三瀬さんに「戦後の復興までの苦勞を教えてください」と質問をした。

二日目は「『違い』とは何か」について話し合った。日本中の色々な地域からたくさんの方が来ていて「より交流が深められるチャンスだ」と思い、できるだけ自分の意見を伝えられるように努めた。決めつけるのではなく、より相手のことを分かろうとすることで、違いでの差別などが減っていくのではないかと思った。皆で出した結論は「決めつける前に見つめ合う」というものだった。皆と意見交換ができたこの経験は今後の人生にも活用できると思う。

この派遣団で自分が知っていた戦争は表面上の事実だけだったと思った。事前学習会の講話やフィールドワークで戦争の事実だけではないものにより目を向けるきっかけになった。実際に長崎に行ってみることでこれまで少し遠い話題だった「戦争とは?」「原爆とは?」という話をたくさん考えることができた。

核戦争の危機は今も続いている。そして終戦から80年がたち、戦争の語り部も少なくなってきた。僕は、核廃絶・戦争根絶を世界唯一の被爆国である日本から世界に訴えていきたいと思った。



「平和は、人類共通の世界遺産です。」

これは、今回の派遣団で最も心に残った、被爆者の方の言葉です。第二次世界大戦があり、広島と長崎に原子爆弾が落とされたという事実を教科書や本などの活字でしか知らなかったため、悲惨さをあまり実感できずにいました。武蔵野市でのフィールドワークでは、武蔵野中央公園や武蔵野陸上競技場などにも戦争の歴史があることを知り、実際の250kg爆弾の破片を手に持ちました。予想以上に重く、この爆弾が空から落下した時の恐怖を感じ取ることができました。

長崎では、原爆資料館と城山小学校が印象に残っています。原爆資料館に展示してあった、一つの赤土の塊は今でも鮮明に思い出すことができます。説明文を読むと「ある夫婦が子供たちの遺体を見つけるために家の瓦礫の中を探した結果、唯一見つかったものはこの『赤土の塊』だけであり、これを子供たちだと思い、大切にしている」と書かれてありました。よく見ると、確かに赤土の表面には数名の子供の驚いた顔が残されていました。この塊を見つけたときの気持ちを想像すると胸が締め付けられました。

また、城山小学校では語り部の方が、生き残った人の名前を一人ずつ挙げ、原爆が投下される直前までの様子や、その後の変わり果てた生活について詳しく教えてくださいました。一人ひとりが何気ない日常を送っていた最中の出来事だったと実感しました。

今回の派遣を通して「戦争は無実の人の命を奪い、そして生き残った人々の生きる喜びも奪ったのだ」と肌で感じました。実際に現地に足を運んでみることで長崎の方たちが、戦争にあった事実を風化させないように尽力されていることにも気づきました。

想像が難しい出来事だからこそ、私たちが被爆者の方からお話をうかがい、インターネットなども活用しながら次の世代につないでいくことが重要だと確信しました。



私はこの夏休みに「青少年平和交流派遣団」に参加しました。最初は顔も名前も知らない人ばかりでとても緊張し、仲良くなれるか不安でした。しかし、事前学習を通していろいろなこととお話していく中で、少しずつ距離を縮めることができました。実際に長崎に行って平和祈念式典や平和祈念像を見てみるととても迫力を感じました。最初は教科書でしか見たことがなかったので、大きさも分かりませんでした。実際に見てみていろんな人から愛されている理由が分かりました。

1日目は、長崎県の高校生、大学生と一緒に平和について学ぶことができ、現地の人のお話も伺うことができました。被爆者の方のお話を聞いて、思っていた以上に苦しかったことが分かりました。毎日訓練をしたり、寝るのが怖かったりなど、いま当たり前になっていることが当たり前ではなく、いまを生きていることに感謝するべきだと思いました。

話を聞き終わった後には、交流会もあり日本各地から来た派遣団の方ともお話しすることができ、とてもあっという間な楽しい時間を過ごせました。

2日目には平和祈念式典に実際に参加しました。普段はテレビでしか見れないものを実際に自分の目で見て、平和について深く考えることができました。

最終日には大雨の影響で夜遅くの飛行機で東京に戻りましたが、その分皆と話す機会が増えてお互いの仲をもっと深めることができたような気がします。2泊3日でたくさん経験をさせていただいて、とても充実した日になりました。

平和について学んだことを見て満足するのではなく、これから私たちの世代になっても続くように、私たちが少しでも多くの人に「平和」について届けていきたいです。



「平和のバトン」

三日間を通して、私が最も印象に残ったのは、被爆者である三瀬清一郎さんのお話でした。三瀬さんは爆心地から3.6kmの地点で被爆し、家族8人は無事でしたが、家の周りの街は一瞬で焼け野原になり、想像もできないような光景が広がっていたそうです。また、被爆者というだけで差別や偏見に苦しんだことも語っていただきました。

三瀬さんが話されたエピソードの中で特に心に残ったのは、原爆投下の日の朝の出来事です。三瀬さんが当時10歳だったその日の朝、祖母から「お昼はサツマイモのご馳走だよ」といわれ、とても楽しみにしていたそうです。ところが、原爆によってそのサツマイモには無数のガラス片が突き刺さり「今日は食べられない」といわれてがっかりしたという話でした。

戦時中、サツマイモが「ご馳走」だったことにも驚きましたが、それ以上にその日の夜、家族全員でご飯が食べられなくて母親にしがみついて眠ったという話には心を傷めました。

三瀬さんの話を通して、私は「たった一つの爆弾が、日常の小さな幸せを一瞬で奪ってしまう」という現実を、改めて感じました。家族とのささやかな食事、そう楽しみに待つ気持ち、誰かのやさしい言葉——そうした当たり前のことが、戦争によって一瞬で壊される。三瀬さんは、そうした日々を語ることで、未来の私たちに向けて「平和の大切さ」を静かに、それでも力強く伝えてくださいました。

最後に、三瀬さんからの言葉を紹介します。

「平和は人類共通の世界遺産です。」

この言葉を胸に、私はこれからも「知ろうとすること」を大切に、平和を守るバトンを受け取った一人として行動していきたいと思います。



長崎を訪れる前、私は、ただ教科書に書いてあるようなことを「知識」として知っているだけで、原爆の悲惨さや被爆者の方々の思いを、どこか自分には関係のない話だと思っていました。そして、派遣団として長崎を訪れ、実際に被爆者の方々の体験談を聞いたり、原爆資料館で原爆の被害を目の当たりにしたりと、自分の中で「知識」だったものが「現実」に変わりました。

被爆者体験談の朗読では、戦時を生き、原爆を体験した方々の思いについて語られ、とても響きました。そして、特に「ノーモア・ナガサキ」「ノーモア・ヒバクシャ」という言葉は心に残り「これ以上私たちのような被爆者を作らせない」という、被爆者の方々の強い意思を感じました。原爆資料館では、並べられている写真や被害を受けている物などから、たった一発の爆弾がもたらした悲劇の大きさ、そこで生き抜こうとした人々の苦しみと強さが伝わってきました。

今回、派遣団として長崎に行くことができ、教科書からは分からないような、当時の人々の心境、原爆の被害など、派遣前に私が知りたいと思っていたところを知ることができました。さらに「ただ知っている」というだけでなく「私だったら…」と、自分のことのように受け止め、学びを深めることができました。

私たちが戦争のない日常を当たり前として生きているのは、戦争を実際に体験した被爆者の方々が、同じ悲劇を繰り返さないようにと活動をしてきたおかげだと思います。長崎での学びを通じて、平和とは、自分たちの行動や発言から始まるのだと考えるようになりました。身近なところから平和について考えることを大切に、派遣団で学んだことを次の世代へ繋いでいきたいです。



今回、大学生サポーターとして中学生、高校生と共に長崎市への「青少年平和交流派遣団」に参加しました。終戦から80年の節目の年にこのような経験をさせていただき、大変有意義な時間となりました。

2日間にわたって行われた青少年ピースフォーラムでの活動の数々は興味深いものばかりでした。戦争下の生活を擬似体験するプログラムでは、私たちが実際に戦争中に生きていると仮定し、いま持っている大切な人、もの、場所の中から何を失い、どのような環境のもとで過ごすことになるのかを実際に体験しました。

私は3日間の派遣事業の中で、被爆体験講話が最も印象に残っています。お話では、原爆投下と終戦の後に始まった2学期の挨拶が「よう生きとった」「助かってよかった」「命があってよかった」といった言葉だったとおっしゃっていました。私の想像を絶するような体験がそこにはありました。被爆体験講話をうかがって、戦争や原爆の悲惨さや惨たらしさを実感するとともに、同じような苦しい経験をする世界にしてはいけないということを改めて考えさせられました。

現代の平和な日本を生きている私たちにとって、戦争を想像することは難しいものです。しかし、体験記や体験講話を通して戦争体験を自分の身で捉え、考えていくことはできると思います。派遣事業では、教科書の知識だけでは知り得ない体験をたくさん経験することができました。この学びの経験が今後の未来の平和につながっていくように願っています。



長崎に訪問する前に、私は大学の授業でドキュメンタリー映画「壊された5つのカメラ パレスチナ・ビリンの叫び」を鑑賞した。あるパレスチナの農民が自身のカメラを用いて戦争の様子を記録していくといったものだが、やがて兵士たちによって壊されてしまう。それでもなんとか新しいカメラに取り換えて記録しようとするものの、それでも壊されてしまう。新調しては、また壊されてと何度も繰り返し、気づいたら5台も壊されてしまった。

これらの壊されたカメラは、すべて原爆の被爆者のように痛々しい傷が負われていた。ネジが何個か落ちていたり、レンズが粉々になっていたり、どれも見るに堪えない姿形となっていた。被爆者で例えると、おき出しになっている骨が粉々になったり、臓器が散らばっていたりと、人間の身体のパーツが彼方此方に点在しているかのような、想像するだけで身の毛がよだつ光景を目の当たりにしているだろう。

そんな戦争が今からちょうど80年前に起こっていた。当時の人々は現代のように気持ちよく朝を迎えられたり、美味しいご飯を食べられたりなどといった当たり前のことができなかった。外に出れば空襲警報が鳴り響き、熱い爆弾があちこちに落ちてくるそんな毎日だった。

やがて戦争が終わって、75年経つと今度はロシアとウクライナで戦争が始まってしまった。また2023年にはガザ地区でイスラエルとハマスの軍事衝突が起こり、そして今年になると今度はタイとカンボジアで国境紛争が起きてしまった。このように私たちが求めている平穏な世の中は、一朝一夕には実現できないと悟られた。

戦争は、お互いの考え方の違いで起きるものである。少しでも違いが生じれば、そこで対立や差別、そして偏見が生じ、そこから争いが起こる。今でも様々な場面でジェンダーや人種などで「喧嘩」や「侮辱」など、言葉による争いが起こっている。これも一種の「戦争」といっても過言ではないだろう。

ならば、どのようにしたら争いはなくなるのだろうか。一つの方法として「互いに違いを認め合って、協力し合う」がある。これは青少年ピースフォーラムの講話でマレーシア元首相のマハティール氏が述べた言葉で、対立を「対話」を通して解決していく方法をもっと広めていくことで、少しずつ争いがなくなって平和へと導くのではないかといったものである。

今後私たちが社会人になった時、世界情勢はどのようになっているのかは分からないが、少なくとも武器を用いた争いは無くなってほしいと願うばかりだ。

事務局より

青少年平和交流派遣団団長 市民部 市民活動担当部長 毛利 悦子
市民部 市民活動推進課 大橋 真木

終戦から80年を迎え、戦争体験者が高齢化していく中、若い世代にとっては周りの人から話を聞く機会も減り、過去の日本の戦争は遠い存在になりつつあります。一方、世界の戦争・紛争などのニュースが毎日のように流れ、戦争や平和を意識する機会は増えているのではないかと考えます。

青少年平和交流派遣事業は、戦争の悲惨さと平和の大切さを次世代に継承するために、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」や「平和祈念式典」へ青少年を派遣し、公益財団法人長崎平和推進協会が主催する青少年ピースフォーラムのプログラムに参加して、フィールドワーク等により、被爆の実相に直接触れるとともに、全国から集う青少年との交流を通して平和の大切さを学び、考えるきっかけとしてもらうことを目的として実施いたしました。

今回参加した団員たちは、長崎市への派遣に先立ち、3回の事前学習会を行いました。この学習会でも市内の空襲や戦争にまつわることに関心を持ち、また、長崎市の歴史などもいろいろと情報を集めて学習発表に臨むなど、意欲的に取り組んでいました。

派遣先の長崎市では、被爆体験者の方のお話を聞き、遺構などをめぐることによって、団員たちは平和の大切さを肌で感じ、認識を新たにしました。また、全国から参加した同世代の仲間と意見交換などを行う青少年ピースフォーラムでは、団員たちは自らの言葉で平和について意見を伝えるとともに、仲間の意見を吸収していました。

6月の結団式から長崎を訪れた8月、そして11月の報告会に向けて、皆大きく成長しました。団員たちがこの事業で体験したことや感じたことを友人や家族、地域など様々な機会を通して伝え活かしていくことに期待しています。

また、派遣最終日の午後は、天候が急変し、搭乗予定の飛行機が欠航となったり、変更した新幹線も運休になったりし、福岡空港で夜まで天候回復を待つことになりました。

団員またご家族の皆様には大変ご心配をおかけしましたが、落ち着いて団結して行動いただいたことで、無事に帰ってくることができました。皆様のご理解とご協力に感謝いたします。

**武蔵野市青少年平和交流派遣団
活動報告書**

**編集担当
林 健心、根本 祐**

**発行 令和7年 11 月
武蔵野市 市民部 市民活動推進課**